
しあわせのおしろ

田中やっか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しあわせのおしろ

【Nコード】

N3688G

【作者名】

田中やっか

【あらすじ】

ペヤンナは好きなローローと一緒に「幸せのお城」に行くことを決めます。そこに行けば誰でも幸せになれるという場所。希望を胸に旅立つペヤンナが最後にたどり着くであろう幸せのお城とはどんな場所なのか。

1・決意

あるところに ペヤンナという女の子が居ました。

ペヤンナは毎日毎日 大好きなローローという男の子と遊んでいました。

何も話をしなくても ローローと一緒に居るだけでペヤンナは嬉しくて仕方ありませんでした。

ある日 小山の上でペヤンナはローローと一緒に夕日を見ていました。

風が心地よく吹き 隣りに座っているローローの温かい温度を感じながら ペヤンナはやはり嬉しくて仕方ありませんでした。

そのまま少し2人で黙っていた後 ローローはペヤンナに話しました。

「この世界には幸せのお城というものがあるんだって。」

「幸せのお城？」ペヤンナは聞き返しました。

「そう。幸せのお城。そこへ行けば誰もが幸せになれるんだって。」

そう話すローローの目はキラキラまっすぐに輝いてペヤンナを見つめています。

ペヤンナが その目に見惚れていると ローローは目をキラキラさせたまま続けました。

「ペヤンナ 僕と一緒に幸せのお城に行こう。」

ペヤンナの返事は決まっています。

「うん。連れて行って。」

「幸せのお城は あの山の向こうにあるんだよ。見えるかい？」

ローローは遠くに見える山を指差して言いました。

ペヤンナは その指の先を見つめて探します。

「あつた！あれがそうなのね！とても眩しく光っている！！！」

ペヤンナは確かに見つけました。山の向こうのもっと先に キラキラと

まるでさっきまで見ていたローローの目のようにキラキラと輝いている光が見えたのです。

「明日 出発しよう。」

ローローは山の向こうを見つめたまま言いました。

その横顔をペヤンナは見つめて そしてローローと同じように山の向こうを見つめて言いました。

「はい。」

2・出発

次の日の朝早く ペヤンナは旅の支度に追われていました。このマグカップはお気に入りだから持っていこう。この本は ずっと前におじいちゃんからもらったんだっけ。ふかふかのブランケットも持っていかなくちゃ。そんな風に 次から次へとかばんに詰め込んでいると あっという間に かばんはパンパンになりました。

「ま いつか。」

ペヤンナがのんきにつぶやいた時 ドアをノックする音が聞こえました。

「そろそろ行こうか。」

ドアを開けて入って来たローローの手には 小さなかばん。

「そうね。行きましょ。」

ニコニコ嬉しそうなペヤンナの手には はちきれそうな大きなかばん。

ローローは呆れて笑っています。

「僕が持とうか？」

「お、お願い。へへへ。」

こうして ペヤンナとローローは幸せのお城へ向けて出発しました。

昼は まるでお散歩を楽しんでいるかのように歩いて

夜は たき火をして話し疲れて眠る。

寝ている間も 起きている間も ずっとローローと一緒に。

目を閉じても目を開けてもローローが居る毎日。

ペヤンナはいつもいつも嬉しくてたまりませんでした。

そんな毎日が続いたある日

大きな山の道を登っていた時です。

ペヤンナの先を歩くローローが立ち止まり

「見てごらん ペヤンナ。」

と視線を横に向けています。

「なにになに？」

と ペヤンナは5歩ほど先の場所で待つローローの元へ行きました。

その場所は視界が開けていて 周りの景色を一望できました。

「わあ いつの間にか山のとっぺん！」と はしゃぐペヤンナに

やわらかく微笑んだローローは

「あれを見て。」

と 目線を移しました。

ローローが目線に移した先には あの幸せのお城がありました。

いつかの小山で見た時よりも ずっと近づいています。

「すごい とても眩しい。」

ペヤンナには見ていられないほどの まばゆい光。

光の出ている場所の少し横のほうには 大きな大きな木が立っ

ています。

『あの木が目印だわ』

ペヤンナは心の中でつぶやいて その目線をローローに向けました。

「あともう少しだよ。」

ローローはそう言うと また歩き始めました。

ペヤンナは もう一度光の方向を見つめた後 ローローの後に続

きました。

出発してからずっと

こんな風に ペヤンナはローローの歩いた道をうしろから着いていきました。

ペヤンナの目には いつもローローの背中が映っています。

心の中は ずっとずっと嬉しさでいっぱいです。

周囲の景色は 見えているけれど見ていません。

なので ペヤンナは頂上に着いて初めて 自分が山道を登っていた

ことに気付きました。

ローローが立ち止まって声をかけなければ

きっと頂上に着いたことにも気付かなかったことでしょう。

そして今も ペヤンナは気付いていないでしょう。

自分が山道を下っていることに。

ローローの背中を見つめ 嬉しさに包まれながらペヤンナはいつも
無意識で考えています。

『ローローについて行けば大丈夫。』

2人は今日も仲良く楽しく幸せのお城を目指しています。

3・静かな夜のこと

夜。

ペヤンナとローローは 山道から少し横に入った茂みのなか
たき火の前で 座っていました。

ローローは 拾ってきた木の枝の山から枝を取り たき火にくべて
います。

ペヤンナは ローローがくべた枝がパチパチいう音を聴きながらウ
トウトとしています。

「ペヤンナ」

ペヤンナは 眠りの前のフワフワした感覚のなかで
自分の名前を呼ぶローローの声を聴きました。

『なあに？ローロー』

ペヤンナは心の中で ローローにそう返しました。

もう すぐにでも眠ってしまいそうです。

そんなペヤンナを見つめていたローローは

静かに まるで子守唄のような声でペヤンナに話しかけます。

「ペヤンナ もしも君が どうしようもない状況に追い込まれたと
きは ただ笑っていなさい。」

幸せそうに目を閉じたままのペヤンナにローローはまた やさしく
語りかけます。

「笑っている間に 僕が助けに行くから。」

座って抱えた自分のひざを枕に眠っているペヤンナを

ローローはそつと横に寝かせ 着ていた上着をかけました。

たき火の火の粉が届かない距離

でも たき火の暖かさが伝わる距離

そんな心地の良い距離で ペヤンナはとうとう眠りに落ちました。

「ペヤンナ」

ローローは寝息を立てているペヤンナに語りかけます。

「もしも僕が・・・」

一瞬 言葉を飲んだローローが また静かに続けました。

「もしも僕が行けなかったとしても 笑っていれば きつと他の誰かが君を守ってくれる。」

そう言ったローローは少し悲しそうな顔をしたように見えました。がすぐにいつものやわらかい微笑みを浮かべました。

「だから 君は大丈夫だよ ペヤンナ。」

そのあとしばらく何か考え事をしていたローローは たき火の火が小さくなってきたことに気付き

木の枝の山に左手を伸ばしました。

すると つかみ損ねたのでしょうか

木の枝が2、3本そのまま地面に落ちました。

少し不思議そうに自分の左手を見つめたローロー。

その手の色は驚くほどに白くなり 指はびくりとも動いていないようでした。

くちびるを噛みしめながら 今度は右手で落ちた枝を拾い

たき火へとくべました。

そして

たき火の明かりに照らされているペヤンナの寝顔を見つめ
泣きそうなほど悲しい顔をしています。

あるいは 泣いていたのかもしれません。

たき火はパチパチ音を立て

ペヤンナはスヤスヤと眠っています。

月が静かに輝く夜のことでした。

4・言葉と心

静かな月夜が明けて 朝が来ました。

ぐっすり眠ったペヤンナは 鼻歌を歌いながら辺りにある花を摘んでいます。

「そろそろ行こうか。」

ローローが 出発の朝から毎朝ペヤンナに言う言葉。

この日も ペヤンナは花を摘みながらローローのこの言葉を待っていました。

しかし

この日の朝にローローが言った言葉は違いました。

「ペヤンナ ごめん。」

ペヤンナは あっけに取られたような表情に微笑みを残しながらローローを見つめます。

ローローは固い表情を言います。

「僕は 君と一緒に幸せのお城に行かない。」

「何を言っているの？何かあったのローロー？」

ペヤンナは まだローローの言葉の意味の半分しか理解していないまま そう言いました。

「何もないよ。ただ 急に行きたくなっただけ。」

固い表情のままのローロー 心なしか発する言葉まで固く冷たく感じます。

そしてその冷たさが ペヤンナの表情をも固く変えました。

「どうして？もう少しじゃない！もう少しで着くのに・・・。」

ようやくローローの言葉の意味を理解したペヤンナは あまりの衝撃と悲しさに声を詰まらせてしまいました。

「とにかく もう行かない。だから町まで帰ろう。」

なおも冷たいローローの言葉に ペヤンナはもう頭が混乱してしま

いました。

ローローは右手で 自分のかばん そしてペヤンナのかばんを持ち 昨日まで歩いてきた道を引き返そうと 無言で体の向きを変えました。

「ローローのばか！もういい！私は一人で帰る！」

ペヤンナは怒って泣きながら ローローが持つ自分の大きなかばんを取り上げました。

「君ひとりじゃ危ないよ！」

とっさにローローは左手を歩いて行こうとするペヤンナの腕に伸ばしましたが

当たっただけでつかむことは出来ませんでした。

「ほっとしてよ！勝手なことばかり言わないで！私はもうローローの顔なんて見たくないの！一人のほうがマシよ！」

ペヤンナはローローの方を振り返ろうともせず そう吐き捨てましたが

怒りと悲しさに耐え切れず うつむいて涙を流し始めました。

ローローは そんなペヤンナの前にゆっくりと歩いてきて 絞り出すような声で言いました。

「僕の顔を見たくないなら 私は絶対に君のほうを向いたりしない。君を町へ戻したら 私は二度と君の前に現れない。だから・・・」

ローローがここまで話したとき ペヤンナの心がチクリと痛みました。

「だからペヤンナ 町までは我慢して僕と一緒に歩こう。」

ペヤンナは 少し違和感を感じていました。

固い表情 冷たい口調で 勝手な言葉ばかりを言うローロー

だけど その言動の端々にペヤンナを思いやる気持ちが見え隠れするのです。

いつものローローの あのやわらかさと暖かさを感じるのです。

しかしそんな違和感も 今のペヤンナの怒りと悲しみの前では掻き

消されてしまい

ペヤンナの心は まるで荒れ狂った海のようになっています。

「いやよ！もういや！もう声も聞きたくない！」

もはやペヤンナは 感情でしか喋ることが出来なくなっています。

うつむいたままのペヤンナは言いました。

「ローローなんて 灰になって消えてしまえばいい！」

その言葉を聞いたローローがどんな表情をしていたのかも見ずに

ペヤンナはうつむいたまま ローローの横をすり抜けて走り出しました。

一瞬遅れて ローローが追いかけてようとしましたが

どうやら左足を引きずっているようで どんなに精一杯走ろうとしてもゆっくりとしか進めないようでした。

大きなかばんを抱えながら ペヤンナはただただ走り続けました。

自分の言った言葉に 体をズタズタに引き裂かれるような感覚のまま その痛みからも逃げるように ペヤンナはただただ走り続けました。

5・ひとり歩き

がむしゃらに山道を走っていたペヤンナ。

どれくらい走ったでしょう。心臓のドキドキする音が耳の奥で熱く響いています。

かばんの取っ手が指にくい込み。足元はふらふらです。

ようやくペヤンナは立ち止まり。自分の呼吸が静かになるまでしゃがみ込んでいました。

『ローローは私を追ってくるだろう』

大きく息を吸ったり吐いたりしながら。ぼんやりと熱い頭でペヤンナはそう考えていました。

追いついて欲しい期待と。逃げたい思い。

どちらも本当なので。ペヤンナは自分がどうしたいのかがわかりません。

『ローローに あんなひどいことを言ってしまった。』

『でも ローローが私にひどいことをしたのだから 当然よ。』

頭のなかは堂々巡りです。

ペヤンナの呼吸が静かに整い辺りを見回すと。太陽がちょうど真上に来ていました。

『とにかく 町へ帰ろう。』

ペヤンナは立ち上がり。山道を歩き出しました。

歩いていると。いろんなことを考えます。

『どうしてローローの態度が急に変わってしまったんだろう。』

『私は なにかいけないことをしたのだろうか。』

『ローローは私と幸せのお城には行きたくないのだ。』

『私だって もうローローとなんか行きたくないわ。』

ペヤンナの心は。やはり悲しさと怒りが一緒になったままです。そんな風に歩いていると。気付けば辺りは暗くなっていました。

『もう夜になってしまったのね。どこかで休まなければ。』
ペヤンナは山道から少し茂みに入り 地面に腰をおろしました。

『どうしてローローは追ってこないのだろう。私なんかよりもずっとずっと速く走れるんだから とっくに追いついていても良いはずなのに。』

『ローローはきつと ひとりですぐのお城に向かったんだわ。』
ペヤンナの心には憎しみが湧いてきました。

『ひどい。なんてひどい人なのローロー。』
そこまで思ったときにペヤンナは もうローローのことを考えるのはやめよう と決めました。

『あんな人のことを考えるなんて バカらしいわ。』

そう 独り言をつぶやいて そこらにある木の枝を集め始めました。そして いざ火を付けようとしたときに 自分がマッチを持っていないことに気付きました。

いろんなものをパンパンに詰め込んだかばんには 残念ながらマッチは入っていません。

そのことはペヤンナ自身がよく知っています。
それどころか

水の出る木を切るナイフだって持ってはいません。

木の実を取るための木登りだって ペヤンナはしたことがありません。

今のペヤンナの状況は 昨日までとはずいぶん違いました。

『今日はそろそろ休もうか』

ローローがそう言えば ペヤンナは座っているだけでよかったのです。

座って歌を口ずさんでいる間に ローローはたき火を用意してくれました。

『喉が渴いた』

『おなかが空いた』

ペヤンナがそう言わなくなつて

「喉が渴いたろう?」

「おなかが空いたろう?」

そうローローが先に言ってくれて　すぐに水の出る木や木の実を持つてきてくれました。

重たいかばんを持つて指が痛くなつたことだつてありません。

「歩き疲れたろう?」

そんな労いの言葉も　もうありません。

「ローロー……。」

ペヤンナは心細くなり　無意識にローローの名前をつぶやきました。しかし　そんな自分の声が耳に入り　ペヤンナはハッと我に返りました。

『ローローが居なくなつて　私は平気よ。』

ペヤンナはそう思い直すと　近くに生えている水の出る木を探し落ちていた石で　叩き始めました。

杉の木のように固い幹を持つわけでは無く

ナイフがあれば簡単に切れる　縦に繊維の入つたさとうきびのような幹。

石ではなかなか切ることは出来ません。

数回叩いているうちに　繊維が潰れ　そこから水が染み出てきました。

ペヤンナはそこに口をつけ　水を吸つて飲みました。

『ほらね。ローローが居なくなつて私は大丈夫。』

しかし　木登りをしたことのないペヤンナは　こんなに暗くては　なおさら木の実を取れないので　今日はもう眠ることにしました。

暗闇の中かばんから手探りでブランケットを取り出し　それにくるまって体を横にしました。

『昨日の頃は とても暖かくて幸せな気持ちだったのに・・・』
ペヤンナは目を閉じたまま静かに涙を流していました。

6・気付くべきこと

ペヤンナは ぼんやりとした頭で朝を迎えました。

『とうとうローローは現れなかった。』

憎いローロー でも やはりまだ大好きなローロー。

そんな気持ちにフタをするように

『別に待っていたわけじゃないけど。』

そう思つて ペヤンナは立ち上がり

のろのろと町へ向かつて山道を歩き始めました。

そんな朝と夜を繰り返し

ペヤンナは ようやく山のふもとにたどり着きました。

目の前に広がる草原 町へと続く道

・・・いつかローローと歩いてきた道。

感傷に浸りたい気持ちをねじ伏せ ペヤンナはひとり歩いていきます。

すると 町の方向から誰かが歩いてきました。

「ペヤンナ！」

ペヤンナに気付いたその人は ペヤンナの名を呼び近づいてきました。

「先生・・・。」

ペヤンナもその人物が誰かに気付いたようです。

それは ペヤンナの町のお医者さんでした。

「おい ペヤンナが居たぞ！」

先生は後ろに向かって叫んでいます。

すると その方向からまた一人こちらに走ってきました。

ローローの家の隣にあるパン屋のおばさんです。

「ローローは ローローはどうしたんだい？一緒じゃなかったのかい？」

おばさんはハーハー息を切らしながらペヤンナに訊ねました。

「ローローとはずっと一緒だったわ。でも急に……」

ペヤンナは悲しさがこみ上げてきて 声を詰まらせながら続けました。

「急に 私とはもう一緒に行かないって言ったの。だから私は一人で町へ戻ってきたのよ。」

ポロポロ涙をこぼし始めたペヤンナでしたが

先生もおばさんも 何か急いでいるように じれったさを含みながらまた訊ねました。

「それでローローはどこに行ったんだい？今どこに居るんだい？」

ペヤンナは少しムツとしました。

『なによ ローローのことばかり気にして。』

そして答えました。

「どこに居るかなんて知らないわ。でも きっと今頃は幸せに暮らしているはずよ。だってローローは私を置いてひとりで幸せのお城に行ったんだもの。」

先生とおばさんは顔を見合わせました。

「その幸せのお城つてのは どこにあるんだい？」

そう訊ねられ

「山の向こうのずっと先よ。とてもキラキラ輝いている場所なの。

そばには大きな大きな木があるわ。」

ペヤンナは 吐き捨てるような投げやりな口調でそう答えました。

また先生とおばさんは顔を見合わせました。

「山の向こうのずっと先にある大きな木……。その木は 遠くから見ても一目でもとても大きいことがわかるくらい大きい木かい？」

おばさんは 少し空気を重たくしてそう尋ねてきました。

「ええ そうよ。山のてっぺんから見たけど とつても大きな木だつて思ってたわ。」

重たい空気に押されて ペヤンナも真剣に答えました。

「そう……。だとするとペヤンナ その場所はね……」
おばさんは寂しげな表情で続けます。

「その場所は ローローが生まれた村があった場所だよ。」
そう言われても ペヤンナには何がどうなっているのか よくわかりません。

「……ローローは幸せのお城に住んでいたの？」
そうペヤンナが訊ねると

「あの村にお城なんて立派なものありやしないさ。小さな家しかない。小さな村だったのさ。そこでローローは生まれて ある事情で私達の町へ引越してきたんだよ。」

おばさんは 少し何かを思い出すようにそう言いました。

「でも 私見たのよ。とても眩しく光っていたわ。眩しくて眩しくて 何も見えないくらい眩しかった。」

ペヤンナがそう言うと

「ペヤンナの見間違いだろ。あの村には もう誰も住んでいない。残された小さな家以外には何もありませんよ。」

おばさんは ため息まじりにそう答えました。

「違うわ！私 見たもの！だって町の小山の上からだって見えたのよ。キラキラ光ってたのよ！」

ペヤンナがそう説明しても 先生もおばさんも首をやれやれと横に振るばかりです。

そんな2人を見て ペヤンナは少し苛立ちました

先生の言った言葉で 我に返りました。

「じゃあローローは その幸せのお城に行くと言っていたんだね。」
「ええ。一緒に行こうって誘われたの。なのに急に私とは行かないって言い出したの。だから私は一人で町へ歩いて戻ってきたけど ローローは私を追ってきてはくれなかった。だからきつと ひとりで幸せのお城へ行ったのだと思うわ。」

ペヤンナは さっきよりはいくらか冷静に話すことが出来ました。

その言葉を聞いてパン屋のおばさんは言いました。

「ローローが あんたを一人で帰らせるわけないじゃないか。」

おばさんは とても悔しそうな悲しそうな表情でペヤンナを見つめ
「ペヤンナ・・・今まであんたはローローの何を見ていたんだい？」
と 問いかけるようにつぶやきました。

ペヤンナはハツとなり おばさんの言った言葉を頭の中で考えていました。

「ローローが私を一人で帰らせるわけがない。」

ペヤンナの頭の中で 今までのローローとの日々がドツと一気に思い出されます。

町に居た頃 毎日毎日ペヤンナはローローと遊んでいました。

朝であるうと昼であるうと夜であるうと ローローはいつだって遊び
び終えたらペヤンナを家へと送り届けました。

知った顔ばかりの安全で平穏な町。

それでもローローは いつだってペヤンナを送り届け ペヤンナが
家にちゃんとカギをかける音を確認してから

窓の中から見送るペヤンナに手を振って自分の家へ帰って行きました。

「ローローが私を一人で帰すわけがない。」

この思いが確信へと変わり ペヤンナの心臓はドクドク音を立てています。

「私は今までローローの何を見てきたんだらう。」

ペヤンナは 自分の鼓動が耳の奥でじわじわ熱く響く音を聴きながら
何か 自分がとても大切なことを見落としていたという 恐怖にも
似た不安に包まれました。

立ち尽くすペヤンナ それを見守る先生とパン屋のおばさん

風がそよそよと草花を揺らす 気味の悪いほどに穏やかな午後のなか
時間は刻々と流れていきます。

7・無知

がくぜんと立ち尽くしているペヤンナ。

おばさんは先生の顔を見ます。

すると 先生は静かにつつむき 首を横に振りました。

それを見たおばさんは 口を手で押さえ涙を流し始めました。

「ううう……。」

おばさんが漏らしたその声で ペヤンナはハツとなり

「なぜ泣くの？」

と訊ねました。

おばさんは泣いたままです。

ペヤンナの質問には 先生が答えました。

「ペヤンナ ローローはね石になってしまったんだよ。」

それを聞いたペヤンナ しかし全く先生の言っている意味がわかりません。

「ローローが石に？そんなはずないじゃない先生。だって 魔法じやあるまいし人が石になんてなるわけがないわ。」

ペヤンナは怒った口調でそう言いました。

すると先生は話し始めました。

何年か前から 世界中のいろんな場所で石になってしまつ人が現れ始めたこと。

石になつてしまった人達に共通することは

親を含め 先祖にローローの村の出身者がいたということ。

「遺伝子というものを知っているか？」

先生はペヤンナに聞きました。

「……ごめんなさい。わからない。」

いったい何が起きているのか ただでさえ混乱しているペヤンナ。

初めて聞く”イデンシ”という言葉に ただならぬ不安を覚えまし

た。

「そうか……。簡単に言つと遺伝子とは 体の設計図とでも言うべきかな。」

ペヤンナが頷くのを確認して先生は続けます。

「石になつた人達 つまりローローの村の血を引く人間には その設計図に”ある時期になると細胞が石化する”と書かれているんだよ。そしてその”ある時期”は人によつて違うものなんだ。」

ペヤンナは首をかしげて言いました。

「サイボウ？」

先生は答えます。

「細胞とは 体を作るものことだよ。私達の体は細胞で出来ている。動物も 植物もだ。」

ペヤンナは頷きました。

「ローローの村でも 数年前から石になる村人達が現れて 子供達を残して大人達はとうとうみんな石になってしまつてな。もちろんローローの両親もだ。」

先生は苦しそうな顔で そう言つと

「あの子の母親と私は友達でね。遠くてめつたに会えなかつたけど・
・それでもたまに手紙のやりとりをしていたんだ。」

涙をぬぐいながら おばさんが話しました。

「でもある時から私が手紙を出しても返事が返つてこなくなつて心配していたんだよ。そしたらある日 村を通つて来たつていう人が私を訪ねてきたんだ。小さなこどもを横に連れてね。それがローローさ。」

おばさんは思い出しながら話し続けます。

「その人は村の女のの人に 私のところをローローを連れていつてくれるように頼まれて来たそうさ。そして手紙も預かつてきたと言つて手紙もくれた。」

ペヤンナは混乱して泣きたい気持ちを抑えながら 黙つて聞いてい

ます。

「手紙には こう書いてあった。」村では石になる人間が出てきた。夫も石になり 私も左手が石になり始めた。ローローのことだけが心配だ。どうかローローをたのむ。」ってね。」
ペヤンナはなおも黙って話を聞いています。

「ローローはね 知っていたんだよ。自分がいつか石になってしまふことを。徐々に石になっていく両親をその目で見てきたんだから どんな風にどれくらいスピードで体が石になっていくのかだつてね。」

おばさんの目からは また涙が溢れてきました。

「ペヤンナ ローローはあんたが大好きだったんだよ。どうしてローローがあんたを自分の村に連れて行こうとしたかはわからない。でも……」

ペヤンナの両肩を掴み おばさんは訴えかけるように言います。
「でもきつと 自分が石になってしまふ前にやりたいことがあったんだろうさ。」

ペヤンナの目からも涙がこぼれ落ちます。

涙の理由はペヤンナ自身にもわかりません。

「ローローはね あんたを連れて旅が出来るような……あんたを守る確実な力と自信が自分に付くのをずっと待っていたんだと思うよ。」

先生も黙っておばさんの話を聞いています。

「それでやつと……やつと あんたと旅に出ることが出来たと思つたのに 途中で石になつちまうなんて あんまりだよ……」
そこまで話すと おばさんはその場に泣き崩れてしまいました。

ペヤンナの頭の中で ローローに対する疑念とその答えの全てが繋がっていきました。

なぜ急にローローが冷たくなったのか

なぜ急にあんなことを言ったのか

不可解だったパズルのピースが、どんどん埋まっていきました。
ペヤンナは居ても立ってもいられなくなり

山へ向かって走り出しました。

「ペヤンナ！待ちなさい！」

先生の声が背中に響きました

ペヤンナの耳には、もう誰の声も何の音も届きません。

『ローロー　ローロー』

心の中でも頭の中でも、ローローの名前を呼び続けながら
ペヤンナはがむしゃらに走り続けました。

8・再会

夜明けとともに歩き出し

日が沈み 辺りが真っ暗になったら野宿。

ペヤンナは そんな生活を続けていました。

『はやくローローを見つけなくては』

先生とおばさんと別れてから ペヤンナはずっと焦っていました。

相変わらず火をおこすマッチを持っていないペヤンナ。

野宿をしていると 暗闇のなかでいろんな思いが押し寄せてきます。

ローローが今頃石になっているのだとしたら・・・

私と一緒に行かないと決断したとき ローローはどんなに苦しい気持ちだったろう・・・

私から ひどい言葉を浴びせられて ローローはどんな思いだったろう・・・

私は なんてことを言ってしまったんだろう・・・

考えたくないのに 次々と頭の中で繰り返します。

『はやく はやくローローに会いたい。』

この思いばかりが馳せて ペヤンナは早く夜明けが来ないかとウズウズしています。

光の無い世界では 道さえもわからない。

毎日毎日 重たい荷物を持つ手も たくさん歩く足も

腫れてパンパンになっていますが

それでもペヤンナは思っています。

『はやく歩きたい。』

今自分が眠っているのか 起きているのかさえ曖昧な日々。

ペヤンナは ひたすらに歩きました。

そして 山頂へ辿りついた時でした。

以前ローローと一緒に歩いてきたとき

ローローが指を指していた方向を見てみると
眩しく

あんなに眩しく輝いていた光は どこにも見当たりませんでした。
目を疑うペヤンナは目印の木を見つけます。

大きな大きな木

あの時に見た 大きな大きな木がありました。

そこから光のあった場所へと視線で辿ると

そこには 豆粒のような小さな家が数軒あるのが見えました。

なおも目を疑うペヤンナ。

何がどうなっているのか さっぱりわかりません。

少しの間 愕然と立ち尽くしていたペヤンナですが

『そんなことよりローローを探さなくては。』

そう思い直し また山道を歩いていきました。

それから数日後 ようやくローローと別れて始めて野宿をした茂み
のところまで歩いてきました。

『きつと もう少しだわ。』

ペヤンナの心臓は 高く鼓動が鳴り響きはじめました。

そして

とうとうペヤンナは見つけました。

道の先に なにか白いかたまりが落ちているのが見えたのです。

一瞬 心臓が止まったような感覚になり

手足は緊張で振るえ出しました。

走って駆け寄りたけれど ちょっと気を抜けばその場に倒れてし

まいそうなほど

頭もぼんやりしてきました。

ゆっくりと近づいていくペヤンナ。

そして ついにその光景を目にしたのです。

石になり固まっているローロー。

右手を伸ばし 顔は上げた状態で道の先を見つめ まるで胴体で這って進んでいるように見えます。

砂ぼこりを被っているものの 髪の毛と着ていた服だけがあの時のローローのまま残っています。

ペヤンナは声が出ません。

まだ悲しみさえも感じません。

ただただ涙だけを流し 白くなってしまったローローの横にしゃがみこんでいます。

ローローの顔は 苦しそうな表情で固まっています。

口は 何かを言っているような形で固まっています。

ペヤンナは そっとローローの頬に触れてみました。

手のひらにさらりとした感触があります。

その手のひらを見てみると 白い白い砂のようなものが付いていました。

『サイボウ』

ペヤンナは 先生が言っていた細胞という言葉を出しました。

『なんてもろいものなの・・・』

ペヤンナは どっと悲しみが押し寄せてきました。

石化してしまった もろい細胞。

ローローが壊れてしまうのが怖くて 触ることも出来ません。

ペヤンナは 途方も無くしゃがみ込むだけでした。

9・願いとともじ

放心状態のペヤンナと 石のローロー。

しばらく経つてから ペヤンナは考え始めました。

『ここで私は死のうか』

ローローの顔を見つめます。

自分のすべてが石になってしまった その瞬間

ローローは何を思っていたんだろう。

少し開いたままで固まっているこの口は いったい何を言っていたんだろう。

ペヤンナは また涙が溢れてきました。

伸ばしたまま固まった その手は

きつとペヤンナを探していた。

前を見つめたまま固まった その目は

きつとペヤンナを探していた。

ローローの固まった心は

きつとペヤンナを探していた。

本当のことはわかりません。

でもペヤンナには そう思えて仕方ありませんでした。

そしてペヤンナの頭に ある考えが浮かびました。

『幸せのお城。そこに行けば 誰もが幸せになれるという場所。』

ペヤンナの鼓動が高まります。

『私の幸せは ローローと一緒に居ること。笑ったり泣いたりしな

がら ローローと生きること。』

ペヤンナは ある決心をしました。

『幸せのお城へ行こう。』

そこへ行けば きつとローローは元の姿を取り戻すはず。

ペヤンナにとって これは最後の希望でした。

『魔法が無くても人が石になるんだから
きつと 元に戻すことだって出来るはず。』

ペヤンナは 伏せたままの石のローローに手を伸ばしました。
なるべく体には触らないように そつと服を掴みながら背中におぶ
ります。

石になったローローは ずしりと重くペヤンナの背中にのしかかり
ます。

触れてしまえばあんなにもろく崩れてしまいそうな石 でも とて
もとても重たい石。

『落としたら壊れてしまう』

そんな危機感がペヤンナを襲います。

ペヤンナは 自分のかばんを持っていくことを諦めました。

大切なものと一緒に思い出がいつぱい詰まったかばん。

しかし 今のペヤンナにとってはローローよりも大切なものなどあ
りませんでした。

「ローロー 一緒に行きましょう。幸せのお城へ。」

背中におぶったローローのほうを向いて ペヤンナは言います。

ふいに触れた頬に感じた あのさらりとした感触が ペヤンナを寂
しくさせます。

ペヤンナは 一步一步 慎重に歩き始めました。

山道には ぱんぱんのかばんだけが残されています。

10・その重み

背中にずしりと重みを感じながら ペヤンナは山道を歩いています。
『下りの道は 大切なものを抱えているとこんなにも進むのが困難なのか』

ペヤンナはしみじみとそう思いながら 慎重に歩いています。

ローローを見つけた場所を離れた次の日の午後

ペヤンナは ローローと別れた地点まで辿りつきました。

野宿をしたときの茂みの中を覗いてみると

そこには あの日のたき火の跡がありました。

そして 無造作に放り出されたままのローローのかばんもありました。

ペヤンナは背負っている石のローローを そつと降ろし

ローローのかばんを手に取りました。

「ローロー 開けるね。」

石のローローに そう話しかけてペヤンナはローローのかばんを開いてみました。

ペヤンナはローローのかばんの中身を見て 少し驚きました。

着替え用の衣服はきちんと折りたたまれ

旅の生活に必要なものが きちんと整頓されて入れられていました。

その中で唯一 場違いなものがあつたとすれば

町で写した数枚の写真です。

パン屋のおばさんも先生も 他のみんなも

町の景色とともに写っています。

もちろんペヤンナの幸せそうにカメラを持つローローを見つめる顔も。

そして ローローの写っている写真はありませんでした。

それを手に取り眺めていると ペヤンナはむしように胸が熱くなってきた。

今は この胸の熱さが何なのかはわかりません。

でもとても なにか大切なことを ペヤンナは思い出しそうになっていました。

それが何かも 残念ながら今のペヤンナにはわかりません。

それから少し休憩をしたあと

ペヤンナは このかばんを持っていくことを決めました。

ペヤンナの持っていたかばんに比べると 小さく軽いローローのかばん。

その中にあつた麻のヒモを2重にしてかばんに結びつけ

体の前にかばんがくるように肩から下げて

またそつと石のローローを背負い ペヤンナは歩き始めました。

目指すは幸せのお城。

光が消えていたのが胸に引つかかっていたが

とにかくペヤンナは かつて幸せのお城のまばゆい光が見えた場所へ

ローローの故郷の村を目指して歩みを進めていました。

腕が重みに耐えられなくなれば 無理をせず休みながら少しずつ歩
く毎日。

いつもニコニコ笑っていたペヤンナは

今はまるで笑わなくなりました。

無表情で歩き続け 夜に野宿をするときには決まって毎晩泣くので
した。

そして 石のローローの顔を我慢しきれずにそつと撫でるのでした。

あのさらりとする感触がする度に 少しずつなめらかに削れていく

ローローの顔。

ある晩 ペヤンナはいつものように涙を流しながらローローの顔を
撫でようとして手を伸ばしました。

するとローローの目が すっかり削れてしまっていることに気付きました。

ペヤンナはびっくりして思います。

『大変！何とかしなくちゃ！』

そしてペヤンナはローローのかばんからペンを取り出し

ローローの顔を思い出しながら

石のローローに目を描きました。

『もつ目には触れてはいけない。』

ペヤンナは固く自分に言い聞かせて その日は眠りにつきましました。

せめて夢の中で またローローと楽しくおしゃべりができたら・・・。

毎晩 そう思っただけで眠りにつくペヤンナでしたが

ローローはまだ一度も夢に現れてはくれません。

失意で目覚める毎朝

かすかな希望を胸に進める歩み

そんなペヤンナの心を支えるものは

背中を感じる ローローの重みだけでした。

11・月日の跡

日々 歩き続けるペヤンナ。

ある日の夜 またローローの顔を見て異変に気付きます。

ローローの鼻が削れて すっかりなくなっていました。

『大変！何とかしなくちゃ！』

ペヤンナはペンを取り出し ローローの顔を思い出しながら鼻を描き足します。

『これで大丈夫。』

そしてまたあくる日の夜

ローローの口が削れてしまっていることに気付きます。

『大変！なんとかしなくちゃ！』

ペヤンナはペンを取り出し ローローの顔を思い出しながら口を描き足します。

『これで大丈夫。』

そんな夜を過ごしながら歩き続け

ペヤンナは やつと目印にしていた大きな大きな木のところに辿り着きました。

目のすぐ先には ローローの村への入り口が見えます。

『やっと やつとここまで来たのね。』

ペヤンナは感慨深く そう思い

「ローロー やつと着いたわよ。」

と 背中をローローに話しかけ 村へと歩き出しました。

村には小さな家が数軒 村の中心にある井戸を囲むように建っていました。

長年誰にも使われていないであろう井戸は苔むし

村は静まりかえっていて 人のいる気配はありません。

『この中に ローローの家があるはず。』

そう思い ペヤンナは一軒一軒家の中に入って探すことにしました。
「おじやまします・・・。」

そう言つて 一軒目の家に入った瞬間

ペヤンナは思わず声を上げました。

人の形を残した姿の石が立っていたのです。

木で出来た粗末な家であるために すきま風が入ってきています。

長年このすきま風にさらされ とてももろい石になってしまったこの家の主の体は

ゆっくりと削られていったのでしょう。

どんな顔をしていたのかもわからないほどに削れて小さくなっていました。

服に守られた胴体や足は どうやらあまり削られてはいないようでしたが

袖から出ていたであろう手は すっかり削れてなくなっていました。
あまりの驚きに一瞬ひるんだペヤンナでしたが

『この人がペヤンナのご両親のどちらかなのかもしれない。』

そう思い 家の中に なにか手がかりがないか探し始めました。

そして 棚の上に置かれている写真立てを見つけました。

どうやらローローの家族では無いようです。

「おじやましました。ごめんなさい。」

ペヤンナは そつとその家を出ました。

そんなことを繰り返す

4件目の家にペヤンナは入りました。

入つてすぐの ダイニングテーブルが置いてある部屋には誰もいません。

そして奥の部屋に入ったときに ベッドに横たわっている石の人を見つけました。

長いスカートをはいているので どうやら女の人のようです。

おなかの上で重ねていたであろう手は やはりなくなっていました。手があつたと思われる部分に 一枚の写真が置かれていました。

「ちよつと見せていただきますね。」

そう言つて ペヤンナはその写真を手に取ります。

長年すきま風にさらされていた写真もまた 色あせていましたが

ペヤンナは その写真に写っている小さな男の子にローローの面影を見つけました。

「ああ・・・ローローだわ。」

安堵からか ペヤンナは涙が出そうになりましたが それをぐつと飲み込みます。

「この人がローローのお母さんなのね・・・？」

背中中のローローに そう訊ねます。

時間の流れさえも止まったように静かな空間のなか

ペヤンナは ベッドに寝るローローのお母さんであろう石の横に

ローローをそつとおろしました。

12・目の前の事実

ローローを降ろし 身軽になったペヤンナは
幸せのお城について なにかわかることが無いかと辺りを調べ始め
ました。

ローローとローローの両親は とても慎ましい生活をしていたよう
です。

家具も食器も 最低限必要なものしか置いてありません。

『きつとローローは ここで幸せに暮らしていたのね・・・』
長年放置されてホコリまみれの家具や食器に触れて ペヤンナはそ
う思いました。

まるで そのひとつひとつには温かな家族の温もりが残っているよ
うでした。

しかし 幸せのお城の手がかりになるものは見つからず

ペヤンナは ひとりローローの家を出ました。

村は相変わらず静まりかえっています。

ペヤンナは苔むした井戸に腰かけ 空を見上げます。

『私はこれから どうすればいいんだろう?』

悲観するわけでもなく 不自然なほどに平静な心でペヤンナは思い
ました。

そして ふと横を見て井戸の水をくむオケを覗いた時

ペヤンナは不思議な気持ちになりました。

雨水が溜まっている桶 その水面に映る自分の顔が

まるで別人のように見えたからです。

頬はやせこけ 目の下にはクマ 顔のいたるところに土や泥が付い
て汚れています。

そしてペヤンナ自身が見たこともないような表情をしている自分が
映っているのです。

町に居た頃はよく「お人形のようだ」と言われていたペヤンナ。口を横に開き 笑顔を作ってみましたが

水面に映るのは ぎこちなく笑う見慣れない顔の自分でした。

でも ペヤンナは別にそれ以上なんとも思いませんでした。

そしてまた空を見上げたとき

ペヤンナは少し怖く固い表情になり

次の瞬間 慌てるように急いでローローの家の中へと入っていきま
した。

「ローロー！」

ドアを開けるなりペヤンナは大声を出し ベッドのある奥の部屋へ
と向かいます。

静かな部屋のなかで ペヤンナは石のローローの顔を覗き込みまし
た。

窓のカーテンの隙間から差し込む光の筋が ローローの顔に当たっ
ています。

ペヤンナはカーテンを開け放ち 再びローローの顔を見ると体を硬
直させました。

「ちがう」

心の奥の底から 自分の声が聞こえます。

「ちがう ちがう ちがう」

心の声はだんだんペヤンナの意識に近づいてきました。

「ちがうわ・・・。」

ペヤンナは小さく嘆きました。

その場に座り込んだペヤンナ 視線はずっとローローの顔に向けら
れています。

ペヤンナの目に映っているのは ペヤンナの知っているローローで
はなく

ただ落書きされた石でした。

「ちがう・・・ごめんなさいローロー・・・ごめんなさい・・・」
ペヤンナは悲しそうに泣いています。
実際 ペヤンナの心は張り裂けそうになっていました。
目の前にあるのは 落書きされた石。
それは かつてローローだったものでした。
落書きをしたのは 誰あるうペヤンナです。
そのことはペヤンナが痛いほど知っています。

石になってしまった時点で ローローはもう命を持つ実体として存在していません。

石の塊になったローローは 目に見える思い出でしかないのです。
その事実から目を背けて 現実逃避するように夢のような幻想を抱いてきたペヤンナ。

いたずらに思い出を懐かしみ その手で触れて壊してしまったことにも気付かず

その上から ねじまがった記憶を頼りに自分で描き直してきた。

それはもはや ローローの思い出とは言えず

ペヤンナが 自分を慰めるために自ら作り出した 自分だけの湾曲した思い出になってしまっていました。

ペヤンナは やっと自分がしてきたことがどういことなのかを知りました。

「ごめんなさい ごめんなさいローロー。」

ペヤンナは もはやローローではなくなくなってしまったものを見つめながら

今はもう存在するのかわからないのかもわからないローローの心に向かって謝り続けました。

「ごめんなさい ごめんなさいローローのお母さん。」

石になるその瞬間までローローのことを思い続けたであろうローローの母親

そんな大切なローローを 自分のこの手で壊してしまった。

ペヤンナは2人に申し訳なくて 謝り続けることしかできませんでした。

「ごめんなさい ごめんなさい・・・」

静かな部屋のなか ペヤンナの声だけが響いています。

13・認めたくない本音

ペヤンナは真つ暗になった部屋の中にたたずんでいました。

『私は どうしたら良いんだろう。』

ぼんやりした頭の中で考えていました。

暗闇のなか 石のローローの方を見つめます。

するとペヤンナの目からは せつかく止まった涙が また溢れ出してくるのでした。

眠れないまま朝を迎え

そのまま夜が来て また朝が来る。

ペヤンナは床にぺたりとしゃがみ込み

体をベッドにもたれかけて居ました。

目はうつろで 何も見ていないかのようです。

涙は もう出ません。

悲しくもありません。

今のペヤンナには 何もありませんでした。

そして 次の次の朝を迎えたとき

ペヤンナは とてつもない喉の渇きに襲われました。

しかし なおもベッドにもたれかかったまま動かないペヤンナ。

表情すら変わっていません。

ペヤンナは心の中で 自分自身と対話をしていました。

『私はこのまま ここで死ぬのが良いのかもしれないわ。』

『もしも死んだ後の世界があるのだとすれば またローローに会えるものね。』

『ローローの居ない世界に なんの希望もないわよね。』

『そうよ。私の幸せは ローローが居ることだもの。』

『もつどこにも無いものを探し続けるのは 疲れたわ。』

『少し苦しいのを我慢すれば　すぐにラクになるわ。』
『そうね。きつとローローにも会える……。』

ペヤンナはいつの間にか眠りに落ち　夢をみました。
その夢の場面には　ローローが居ました。
ペヤンナも一緒に居ます。

ローローは家の電球を取り替えているところです。
ペヤンナは台所で野菜を洗っています。

「ペヤンナ　その電球を取ってくれるかい？」

ローローがペヤンナを見つめて話しかけます。

いつもの　あのやわらかい微笑みで　子守唄のようなやさしい声で。

「ローロー　お野菜はグラタンにしようかしら？」

ペヤンナもローローを見つめて話しかけます。

嬉しそうに微笑んで　お人形のような顔で。

夢はそこで終わり　ペヤンナはハッと目を覚ましました。

眠りながら涙を流していたようで　こけた頬は濡れていました。

ペヤンナの胸に　熱い何かがこみ上げてきます。

そして　ひどく痛みます。

ペヤンナは　悲しみを取り戻したのです。

そして　喜びも。

ペヤンナは枯れた声で泣いています。

夢のなかの幸せな感覚が　新鮮に残っていて

今の現実の　ローローの居ない寂しさもまた　新鮮で。

すると　急に自分の体の重さに気付きました。

体はだるく　力が入りません。

喉は焼けるように熱く　口の中はカラカラにくっついていてるようでした。

『死にたくない。』

ペヤンナは焦点の合った目に力を入れて 思いました。

『私は 死にたくない。』

そう強く思うと

ペヤンナは両手に持てる限りの力を込めて部屋の中を ドアに向かって這いだしました。

途中 何度もペタリと倒れ込みながら ズズツズズツと這っていきます。

ようやく外に出て 井戸に辿りつく

雨水の入った桶の水に顔を入れ 雨水を飲みました。

「ハアハア・・・」

荒い息遣いで 井戸に寄りかかるペヤンナ。

文字通り 生き返った思いでした。

何日ぶりに水を得た喉は じわりじわりと熱くなっていくように感じます。

見上げた空は 何事もなかったかのように澄みわたり

村の周囲の森からは 鳥のさえずりが穏やかに響いていました。

14・卑怯な自分

井戸に寄りかかり　しゃがんだままのペヤンナ。

喉の渴きは癒え　呼吸も落ち着きました。

そして思うのです。

『ローロー　私はあなたのためには死ねない。』

そう思ったときペヤンナは　まだ自分が何かのせいに行っていると感じました。

そして　改めて思います。

『違う。私は　あなたのためには死なないだけだ。』

そして　自嘲気味に微笑みを浮かべ

『私は　私のためにしか生きないし　私のためにしか死なない。』

そう思いました。

『それでも・・・』と　また思考を進めたとき
なんて自分勝手なんだろうと　また自嘲するのです。

それでいてなおペヤンナの思考は　身勝手に本音を語ります。

『ローロー　私はあなたを愛しているわ。』

体も心も　思考も感情も取り戻したペヤンナ。

何か　ふっきれたようにも見えます。

しかし　以前とは少し違うことにも気付いていました。

胸の奥にぼつかり穴が開いたような感覚があるのです。

実際に体に穴など開いているはずもないことは　ペヤンナだってわかっています。

でも　確かに感じるのです。

大きくて　暗くて　底のない穴の気配を。

これが心なのだろうか　とペヤンナは思います。

そして目を閉じ意識を集中して　心の中の”穴”の気配がするほうへと近づいていきます。

近づくにつれて大きくなる不安と恐怖　そして懐かしさと安心感。
不思議な感覚です。

穴の中に　どこまでも落ちていってしまいそうな恐怖感
どこまでもずつと落ちていきたいような安心感

それは　油断したら引き込まれてしまいそうに魅力的なものでした。
『きつと　この穴に落ちると　思考も感情もなくなってしまうんだ
わ。』

ペヤンナは　そう確信しました。

ローローを失ったことで開いた穴。

・・・ローローが私の心に残してくれた穴。

ローローを失ったことで生じた痛み。

・・・ローローが私に残してくれた痛み。

そして　ローローと一緒に生きた時間の記憶。

『これがあれば　私は大丈夫。』

ペヤンナは強く思います。

そして心の中でローローへと語りかけます。

『ローロー　あなたの居ない世界でも　私は生きていたい。』

そう思う自分にガツカリして　胸が痛みます。

それでも　これがペヤンナの本音なのです。

自分でも直視したくない本音。

きれいな言い訳のベールに隠し続けていた　まぎれもない本音。

謝るのが適切かどうかなんてわからない。

それでも謝りたい気持ち　ずっとペヤンナの心にあります。

愛している　でも死なない。

自分勝手だとしても　生きたい。

でも　そんな自分を謝りたい。

『なんて中途半端な自分なんだらう。』

ペヤンナは　自分がとても卑怯な人間であることに気付きました。

ローローはきつと ペヤンナには生きて欲しいと思うでしょう。
ペヤンナが生きることを選んだのを 安心して喜んでくれるでしょう。

しかし それとこのことは関係がありません。
ペヤンナ自身の問題なのです。

本当に申し訳ないと 心からそう思うなら すでにペヤンナは死を
選んでいたはずです。

そうでなければ”謝りたい”なんて思うことは
ただのペヤンナにとっての慰めでしかありません。

しかし今は卑怯な自分と戦う心の余裕が無いことも わかっていま
した。

『今は 自分の未熟さを受け止めよう。』
ペヤンナは歯をくいしばりました。

『ごめんなさい ローロー。私は 生きる。』
心の目で 身勝手な自分を直視しながら ペヤンナはそう思いま
した。

そして自分の足で立ち上がり
ゆっくりとまっすぐに ローローの家へと歩いていきました。

15・その一歩

ベッドで体を寝かせたままの 石のローロー そしてローローのお母さん。

ペヤンナは そつとローローの顔に手を伸ばすと
自らペンで描いた部分を撫でました。

あのさらりとした感触とともに 描いた部分もなめらかに削れていきます。

「ごめんなさいローロー。」

そう 声をかけながら撫で続けます。

そして ローローの顔はすっかりなくなりました。
人型の白い石になったのです。

あとは すきま風が時間とともに風化していくだけです。
ペヤンナは そつと手を離しました。

『ローロー ナイフとマッチをもらっていくね。』

ペヤンナは心の中でローローに話しかけました。

少しの間 石のローローを見つめたあと

ペヤンナは家の戸を開け 外へと出て行きました。

『行ってきます ローロー。』

また心の中で話しかけながら ペヤンナは村を出て行きます。
と その時

風がビューッと強くペヤンナの背中を押ししました。

ペヤンナは まるでローローが背中を押ししてくれているように感じて
少し涙ぐみましたが

『気のせいよ。』と ひ弱な心に言い聞かせて
立ち止まらずに進みました。

そして 村の近くにある大きな大きな木のところまで来ると

ペヤンナは立ち止まり 辺りを見回しました。
ポケットにはナイフとマッチとハンカチが入っています。
両手に荷物はありません。

背中に背負うものも もうありません。

『どこへ行くのかな。』

そう思うペヤンナには 考えていることがありました。

ローローと離れてからの この1ヶ月ほどの間に

ペヤンナは何度も何度も”わからない”ことに遭遇しました。

ペヤンナは 自分が今までまるで何も知らなかった 何も知らなかった
もしなかったことに気付いたのです。

ペヤンナが生まれてからは両親が

ローローと出会ってからは 両親とローローが

両親が仕事で町を離れてからは 町の人とローローが

ローローと旅に出るからローローと離れるまではローローが

いつもペヤンナを守ってくれていました。

いつもペヤンナを導いてくれていました。

ペヤンナは心配事などなく 毎日ただ生きているだけでよかったの
です。

このまま町へ帰れば きつと町の人達が何とかしてくれます。

両親のいる町へ行けば きつと両親が何とかしてくれます。

そうすればペヤンナは 何も心配せずに ただただローローを失っ
た悲しみに浸ることが出来るのです。

しかしペヤンナは今 生まれて初めて自分の足で立ったような感覚
になっていました。

誰かにおんぶされて生きてきたペヤンナの人生

しかしやつと やつと自分の足で立つことを覚えたのです。

『なにかもを知りたい』

ペヤンナは なにも知らない自分がいかに愚かであるか

自分が背負うべきものまで 守ってくれる人達に背負ってもらって

いた自分が いかにも愚かであるか

その愚かさに打ちひしがれていました。

『これ以上 私が愚かなマネをするのは 私が許さない。』
そう思い 唇をギュッと噛み締めます。

前後左右360度に広がる景色のなか
どの方向に進むか。

ペヤンナは

『自分の足で立てばどこにだって行ける』
そうして 一步を踏み出しました。

16・非力

ペヤンナは自分の町の方角と反対側の道を進んでいました。途中 喉が渴けば水の出る木を探しナイフで切りおなかが空けば 木に登って木の実を取る。そんな毎日です。

歩きながらペヤンナは思います。

『幸せのお城とは何なのだろう。』

ローローが嘘をつくとは思えません。

それに ペヤンナは確かに見たのです。

直視することも出来ないほどに眩しい光を。

『ひよつとしたら 移動するものなのかしら？』

お城が動くとは思えませんが ペヤンナは世界が自分の知らないことで溢れているということを感じているので

とにかく調べてみよう と思いました。

『世界中探せば きつと見つかるわ。』

そして 歩き続けます。

ある夜 森のなかでいつものようにたき火をして眠っていると 茂みからガサガサという音がして ペヤンナは目を覚ましました。たき火の火は燃やすものが尽きて もうすぐにでも消えてしまいううになっていました。

「誰？」

ペヤンナは音のするほうに声をかけますが 返答はありません。ペヤンナを不安が襲います。

じりじりと道に近い方へ移動を始めたペヤンナ その時です。

茂みの中から大きなクマが現れました。

なにやら唸ってこちらを見ています。

目を合わせたまま動けなくなったペヤンナ

少しでも動けば 一気に襲い掛かってくるような緊張感です。

たき火の火が消え 辺りが暗闇に包まれたその一瞬に

ペヤンナは立ち上がり 逃げ出そうと走りました。

そんなペヤンナの背中を 飛び掛ってきたクマの爪が襲います。

背中に走る激痛

しかし ペヤンナは茂みから抜け出すことに成功しました。

そして 道をそのまま駆け抜けていきます。

背中に感じる熱さと 濡れたような冷たさ

息は上がり なお走り続けていると

だんだんと足がふらふらになってきました。

そしてとうとう転んでしまい 辺りを見ると

いつの間にか道の脇には街灯がぼつんぽつんと立っていました。

走りぬけてきた道のほうを見ると

もうクマは見えず 追ってくる気配もありませんでした。

「森を抜けたのね・・・よかった。」

荒い呼吸のまま独り言をつぶやいたペヤンナ。

前方を見れば すぐそこに町の明かりが見えます。

『せめて せめてあの町まで歩かなくては。』

そう思い 立ち上がるうとした瞬間

重い耳鳴りがペヤンナを襲いました。

頭は重く 町の明かりがだんだん暗くなっていきます。

『せめて あの町まで・・・』

そう思った次の瞬間

ペヤンナはとうとう意識を失って倒れ込んでしまいました。

道の真ん中で倒れているペヤンナを

草むらから聞こえる虫の音が包み込みます。

17・差し伸べられた手

目を覚ましたペヤンナ。

明るさだけが目の中に飛び込んできましたが

頭の中がぼんやりしていて まだ起き上がってはいません。

『私は……』

ペヤンナはぼんやりと記憶を辿ります。

『そう クマが襲ってきて 町の明かりが見えて……』

ようやく 途切れた記憶の端にたどり着き

驚いたように慌てて起き上がると

ズキズキとする背中 of 痛みに 唇をかみました。

白いカーテン 白いシーツ 白いカバーのかけられた布団

ベッドサイドの棚には 唯一のペヤンナの持ち物である

ハンカチ ナイフ マッチが置かれています。

そして 隣りの部屋からは話し声が聞こえます。

見たところ ここは病院のようでした。

『誰かが見つけて運んでくれたのね……。』

ペヤンナは 久しぶりのベッドの上のやわらかい感触に

またそのまま眠りたくなりましたが

とにかく話をしなければと

ベッドの横に置かれていた自分の靴を履き 隣りの部屋へと行きま
した。

すると そこには1人の医者が年配の女性が居ました。

医者はペヤンナに気付くと話しかけてきました。

「具合はどうですか？」

やさしそうな笑顔に ペヤンナは少し警戒心を抱きます。

「……大丈夫です。」

そんなペヤンナの様子を見て また医者は話しかけます。

「それはよかった。でも まだ寝ていてください。すぐに私も行きますので 少しお話を聞かせてください。」
丁寧な口調でやさしく話しかけられると

「・・・わかりました。」

そう言っつてペヤンナは また隣りの部屋に戻っつていきました。

またベッドに入り 背中が付かないように体を横に倒します。
深いため息をつき

『まず最初にお礼を言うべきだったわ・・・。』
と 自分の無礼さに気付きました。

『だめね 私は。』

そう少し気分が落ち込んだとき 部屋の戸をノックする音が聞こえました。

「入りますよ。」

さきほどの医者の方が 扉の向こうから聞こえました。

「はい。」

その声をかけると 医者がまたさきほどのような笑顔で入っつてきました。

「さきほどはどうも。私はこの町で医者をしているタウという者です。」

そして ペヤンナも自己紹介をします。

「助けていただいてありがとうございます。私の名前はペヤンナです。」

医者は首を横に振り言いました。

「いえいえ あなたを見つけてここへ運んできてくれたのは私ではありませんよ。あなたを助けてくれたのはイルドラという この町に住む羊飼いの青年です。」

『そうだったのか。』

と 少しポカンとした顔をしたペヤンナでしたが

「いえ・・・でも 先生。治療をしていただいて ありがとうございます」

いました。」

と一瞬遅れながらも 医者に感謝の言葉を言いました。

「はい。どういたしまして。」

なんだか のほんとした感じの口調の医者に

ペヤンナの強張ってきた顔が 少し緩みました。

「背中が少し深いので もう少し入院しててください。」

医者がペヤンナにそう言うと ペヤンナの中に不安がよぎります。

「いえ それは……。先生ごめんなさい。私 お金を持っていないです。」

ペヤンナが気まずそうに申し訳なさそうにそう言うと

「ああ 大丈夫です。心配いりませんよ。」

医者はためらうこともなくそう言い また続けました。

「あなたの住んでいた町の病院の先生から 少し前に手紙が届いていたんです。」ペヤンナという女の子がもし来たら よろしく頼む
”って書いてありましたよ。”

にこやかに言う医者の言葉に ペヤンナは愕然とした思いになりました。

そして医者は また続けます。

「あの先生は私の医学校のときの恩師で 私の尊敬する先生なんです。」

嬉しそうに話す医者の中で ペヤンナは動揺しつつ言います。

「そう……。ですか。先生ごめんなさい 少し気分が悪くなってきたので眠っても良いですか？」

それを聞いて少し心配そうな表情になった医者が言います。

「ああ ごめんなさい。長旅で疲れも溜まっていますよね。ゆっくり眠ってください。」

「……。ごめんなさい。ありがとうございます。」

ベッドにもぐり込んだペヤンナは 医者が部屋のドアを閉めた音を確かめると

静かに考えはじめました。

『まさか町の先生が手紙を出していたなんて……。』
これで心配することなく傷を治すことが出来る
そんな安堵感と

やはり私は誰かに守られていないと生きていけないのか
その絶望感が

ペヤンナの心を襲いました。

『せつかく一人で生きていこうと思った矢先なのに。』

静かに悔し涙を流すペヤンナを

まるで『でも 私ひとりでは あのままのたれ死にしていたらろう』
と語りかけるように

背中はずきズキと痛み続けています。

ベッドの上 やわらかで暖かい布団にくるまりペヤンナは終始考え事をしていました。

何を考えても堂々巡りです。

窓に目をやると 空はもう夕暮れ時のオレンジ色に染まっていた。

『もう何も考えず 今は背中傷が治るのを待とう。』

ペヤンナは次々溢れてくる思考を押さえつけ とりあえずの結論で納得するにしました。

そのとき 病室のドアをノックする音が聞こえました。

「ペヤンナさん 具合はいかがですか？」

医者声が扉の向こうから聞こえます。

「・・・ええ。おかげ様で すっかり良くなりました。」

ペヤンナが そう答えると扉が開き医者が現れました。

「ああ それはよかった。夕飯をお持ちしましたよ。」

そう言いながら 医者がベッドサイドの台にスूपやパンがゆの乗ったトレーを置きました。

「食事を取って体力をつけてください。」

医者はにこやかに話しかけます。

「ありがとうございます。タウ先生。」

ペヤンナも 自分なりに少しにこやかに答えました。

そんなペヤンナを見た医者は ホツとしたように笑い

「このりんごは ペヤンナさんをここへ運んでくれたイルドラがさつき持って来てくれたものですよ。あなたのことをとても心配していましたが 今日帰ってもらいました。」

と トレーの上に置かれたりんごに目配せをしながら言いました。

「お気遣いいただいてありがとうございます・・・私もイルドラさんにぜひお礼を言わせていただきたいと思います。」

そうペヤンナが言うと

「イルドラは きつと明日も来ると思いますよ。」

先生は そう答えました。

「じゃあ もし明日来てくださったら 病室にお越しくださるよう
に伝えていただけますか？」

そうペヤンナが言うと

医者はやさしく微笑み頷き 部屋を出ていきました。

ペヤンナはフーッと大きく息を吐きました。

手には冷や汗がにじんでいます。

ペヤンナはこの2ヶ月間ほど まともにと話することのない生活を
していたので

人と話すことに対して とても緊張している自分に気付きました。

『私の言葉使いは大丈夫だったかしら？』

自分がいかに物を知らないか それがコンプレックスとなっている
ペヤンナは

そればかりが気になって 交わした会話の内容を思い返していきま
す。

『明日はイルドラという人にきちんとお礼を言わなければ。なんて
言おうかしら・・・』

りんごを食べながら ペヤンナは言葉のことばかりを気にしていま
した。

そして次の日 医者の言ったとおりイルドラは病院へやってきまし
た。

ペヤンナのいる病室へと入ってきたその青年は 背が高く日に焼け
て とても健康そうに見えました。

「少しはよくなりましたか？」

照れたように笑いながら イルドラはペヤンナに話しかけました。

「はい おかげ様でも良くなりました。助けていただいて本当
にありがとうございます。」

昨日 頭のなかで繰り返していた言葉をペヤンナが言うと

「いや 元気になってくれれば俺はそれでいいんです。」
くしゃっと笑ってイルドラは言いました。

「長居するのも悪いんで もう帰りますね。ゆっくり治してください。」

そうイルドラが言うと ペヤンナは安堵しました。

「イルドラさん 本当にありがとうございます。」

昨日練習したとおりにお辞儀をして ペヤンナはイルドラを見送りました。

『よかった。ちゃんとできたわ。』

冷や汗をかいた手を握りながら ペヤンナは思いました。

それから少し後に 医者がペヤンナに昼食を持ってきました。

「イルドラは あなたが元気そうなので とても安心していましたよ。」

相変わらずにこやかにそう話し 昼食の乗ったトレーを台に置きましました。

「過酷な生活をされてきたせいか胃が弱っているようなので しばらくはスープやパンがゆで我慢してくださいね。」

そう微笑み

「そうそう イルドラがまたりんごを持ってきてくれたんですよ。医者はそう言って トレーの上のりんごに目配せをして出ていきま

した。

ペヤンナはトレーの上に置かれたりんごを見つめると 言葉を失いました。

『りんごのお礼をするのを忘れていたわ。』

ペヤンナはそんな自分に心底失望しています。

『りんご とてもおいしかったです。ご馳走様でした。』

頭の中で こんなセリフを考えながら食事を摂りりんごをかじります。

『次に会ったら ちゃんと言わなければ。』

ずっとそんなことばかり考えているペヤンナ

自分が今食べているものの味なんて 少しもわかりません。

『次こそは ちゃんと言っわ。』

「りんご とてもおいしかったです。ご馳走様でした。」

ちゃんと言っわ。』

19・馳せる思い

次の日の朝 ペヤンナは病室で医者と話していました。

町を出てからのことを ペヤンナは少しずつ思い出しながら医者に語っています。

もちろん ローローの身に起こった出来事も。

「・・・それは大変でしたね。」

ひととおり話を聞いた医者が そう声をかけると

ペヤンナは言葉ではなく 微笑みで返しました。

「・・・石になる病の症例は私も去年実際に見たことがあります。

医学校時代の友人が その病の研究をしているので 去年彼の研究室がある病院に行き そこで見せてもらったんです。」

そう話しかけた医者の言葉に ペヤンナはピクツと反応しました。

「タウ先生 私はあの病気のことを知りたいんです。それだけじゃない サイボウとかイデンシとか 私には知らないことがたくさんあります。」

急に言葉を強くして話し始めたペヤンナの言葉を 医者は頷きながら聞いています。

「私は知りたいんです。ローローがなぜ死んだのか ローローの体の中で何が起こっていたのか。」

我を忘れたように医者に向かって話し続けるペヤンナ。

「・・・私が 私が何か出来ていれば ローローには助かる可能性があつたのか。」

ペヤンナの目からは涙がこぼれ落ちます。

「私は 知りたいんです。」

そう言つて まっすぐに医者を見て涙を流すペヤンナに

「本当に深く知りたいと思うのなら あなたは学校へ行き学ぶべきです。」

医者は今まで見たことのない真剣な顔をして ペヤンナにそう言い

ました。

「学校・・・？」

ペヤンナは目を丸くして聞きました。

「そうですね。学校へ行けば いろいろな知識を教えてもらえますよ。知識を身につければ あなた自身で 自分の知りたいことの答えを探すこともできるようになります。」

学校。

それは今までペヤンナには全く関係のないものでした。

小さな町では 女の子は裁縫や料理など 男の子は作物の育て方や家の建て方など

生活に必要な知識こそが大切に

学校は 生活には全く必要の無い知識を学ぶ場所
そう思っていたのです。

『学校へ行けば 私が知りたいことの全てを知ることができるとも
しれない。』

ペヤンナの心は踊り 心臓は強く鼓動を打ち始めました。

「タウ先生 学校へ行くためにはどうすれば良いのですか？」
すっかり涙の止まったペヤンナは医者にたずねます。

「この町から北へずつと行ったところに アルデマイラという大きな都市があります。そこは都市全体が学校になっていて 様々な分野ごとに区画が分かれています。」

医者の話を ペヤンナは真剣に聞いています。

「中央には大きな塔が立っていて そこではすべての分野の最先端の研究がなされているんですよ。」

医者の言葉にペヤンナは胸がとてもワクワクしているのを感じました。

そんなペヤンナのキラキラした目を見つめ 医者は続けます。

「ただ 学校へ行くにはお金がかかります。学校で授業を受けるためのお金 教科書やノートや鉛筆を買うお金 そしてもちろん生活

をするお金もです。」

この言葉を聞き ペヤンナの心には雲がかかったようになりまして。ペヤンナはお金など持ったことはありません。

他の町や村へ行ったときはお金が必要だということは知っていましたが

自分のいた小さな町の中では お金は必要ではありませんでした。たまにパン作りや畑の水まきなどのお手伝いをしたり 小さい子の子守りをしたり

自分に出来ることをしていれば生活に必要なものは全て町の人からもらえました。

それは町の人達も同じで

商売をしている者同士は物々交換のようにしていたし

お金が必要なのは 町以外から旅人や商人が来るときだけでした。

ペヤンナが住んでいた町だけではなく 他の小さな町や村はみな同じようにして成り立っていました。

しかし 大きな町で生活するには やはりお金が必要なのです。

『まずはお金を稼がなければいけないわね。』

ペヤンナは 心にかかった雲を取り払うように 冷静にこれからの道筋を考えていました。

『私に出来るかしら……。でも やらなければ。』

不安を抱きつつ ペヤンナはそう決意しました。

何やら考えこんでしまっているペヤンナに

「でも まずは背中傷と心身の疲れを癒してからですよ。」

医者は見慣れたやさしい笑顔で そう言いました。

「はい。わかりました。ありがとうございます先生。」

ペヤンナがそう答えると 医者は診察の時間になったので病室を出ていきました。

『学校……。どんなところなのかしら。』

ひとりになったペヤンナは想像を膨らませています。

『ローロー 私は学校に行くわ。』

ローローの村を出てからというもの ペヤンナは心の中で事あるごとくにローローに話しかけています。

ローローはもう戻ってはこない 頭ではそう理解しながらも心がまだ付いていきません。

ローローのことを思っているとき ペヤンナは何よりも幸せになるのでした。

寂しく暗い野宿の夜も ローローのことを思えば暖かく満たされた気持ちがあみかえってきました。

ペヤンナの心 という部屋のなかでローローと2人きりの時間が今のペヤンナにとって 唯一安心できる時間でした。

そんな時間に浸っていると

突然ドアをノックする音で ペヤンナは現実世界へ戻ってきました。

「ペヤンナさん イルドラです。調子はどうですか？」

ドアの向こうからイルドラの声が聞こえます。

『邪魔しないで。』

無意識でペヤンナは思いながら

「ええ。とても良いです。イルドラさん どうぞお入りになってください。」

やわらかく微笑みながら ペヤンナはドアの向こうへと声をかけました。

20. 月に吠える

「こんにちは。」

イルドラは照れ笑いを浮かべながら、ペヤンナの病室へと入ってきました。

「こんにちは。」

ペヤンナも微笑んで返します。

「それと、りんごをありがとうございました。とても美味しかったです。ご馳走さまでした。」

何度も頭のなかで繰り返し返していた言葉を、ペヤンナは言いました。

「いえいえ。今年はとでもたくさんりんごがとれたので……。実は今日も持ってきたんで、よければ食べてください。」

「・・・イルドラさんは、りんご農園をやっていらっしゃるんですか？」

そうペヤンナが聞くと

「はい。うちの親父がやっているのを手伝っているだけですが。」

イルドラはそう返しました。

ペヤンナは少し何かを考えたあとに、またイルドラにたずねました。

「近くの町や村にも売りに行ったりするんですか？」

イルドラはきさくに答えます。

「いや、近くだと俺と同じようにりんごを栽培している農家があるんで、収穫の時期は月に1度、冬場は地下で凍らせておいたりりんごを2ヶ月に1度、遠くの町や村まで売りに行きます。」

ペヤンナは興味深々で聞いています。

そんなペヤンナの姿を見て、イルドラは顔をくしゃくしゃにして言いました。

「ペヤンナさん、りんご売りに興味があるんですか？」

ペヤンナはハツとなり、少し照れ笑いをして言いました。

「いえ……。あの 実は私 働いたことがなくて。商売ってどんな風にするのかなあって ちよつと興味があるものですから。」
そんなペヤンナに イルドラは言います。

「ああ そうでしたか。じゃあ 俺と一緒に going to みますか？」
ペヤンナは突然の話にキョトンとして固まっています。

「あ もちろん背中 of 傷が治った後で ですが。もしよければ。」
イルドラは まるで簡単なことでもするかのように そう言います。
「ぜひ……。ぜひお願いします。お邪魔にならないように精一杯頑張ります。」

事態を飲み込んだペヤンナは またとないチャンスに飛びつきました。

「じゃあ そうしましょう。次の出発はあと3週間後ですが もし傷が治っていないければ その次の月にでも。」

イルドラは くしゃつと笑って言いました。
ペヤンナも やわらかく微笑んでいます。

その夜 ペヤンナはひとり病室の窓を開けて夜風に当たっていました。

『商売の方法を身に付ければ きつと役に立つわ。』
昼間のイルドラとの会話を思い返しながら ペヤンナの心は前を見つめていました。

『私は大丈夫よ ローロー。』
ふーつと大きく息を吐き

見上げた空には月が静かに輝いています。

『こんなにゆつたりとした気持ちで月を見るのは とても久しぶりだわ。』

そう思いながら 最後にゆつたりと月を見上げていたときのことを思い出しました。

『たき火がとてもあたたかくて そばにはローローが居て……。』
そしてペヤンナは思い出していきます。

『眠りに落ちそうになっていた私に　ローローは何かを話しかけてくれていたわ・・・』

その言葉を思い出そうと　ペヤンナは記憶を辿ります。

”ペヤンナ　もしも君が　どうしようもない状況に追い込まれたときは　ただ笑っていなさい。”

ふいに　思考とは別のところから　あの日のローローの声が響きました。

思い出そうとすればするほど思い出せなくなる　懐かしい声。

もう忘れてしまったと思っていた　その声を

ペヤンナの耳は　ちゃんと覚えていました。

『ローロー　私ちゃんと笑うわ。』

そう強く思いながら　ペヤンナは月を見上げて笑ってみせます。

”笑っている間に　僕が助けに行くから。”

また懐かしい声が心の中に　耳の奥に　響きます。

『私は何があっても笑って笑って生き抜くわ。』

まるで誓っているように　ペヤンナの笑顔の目の奥は真剣です。

『どんなに苦しいときだって　誰にもばれないように上手に笑うわ。』

そして　笑顔でにらみつけるように月を見つめます。

『ローロー　あなたを嘘つきにはさせない。』

まるで時間が止まっているかのように　月もペヤンナもそのまま動きません。

『あなたの助けなど必要ないくらいに　私は強くなるから。』

ペヤンナはただ月を見つめ

月はただ静かに輝いていました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3688g/>

しあわせのおしろ

2010年10月28日07時07分発行